

骨の大地 —東北地方地獄変—

穢銀杏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お前は心の底では理解しているはずだ。

そうだろう？ 他に道なんてない。

人間は化け物だ、化け物なんだよ。

(『メトロ エクソダス』より)

※史実に基く。

※拙ブログに同一内容の記事があります。

外伝
・
外伝

後編

前編

目

次

12 9 5 1

東北にはサイクルがある。

五年刻みの、悪夢のようなサイクルが。

この地方——特に岩手・青森・秋田の三県。これらに於ける農業は、五年間のうち一年はまず大飢饉、二年が飢饉、残り二年で漸くのこと平作あるいは豊作と、こんな周期をいつまでも繰り返す定めにあるのだと。呪いめかしい、さても不名誉な認識が、ほんの百年以前まで罷り通つていたものだ。

理由は何か、いつたい何時の頃からか、調べるのも億劫になるほど古い古いこの因縁——。

だが、なればこそ彼の地には、他に見られぬ特異な食文化が根付いてもいる。保存食の発達が著しいのだ。干し菊などは、今でも青森の名産として名が高い。

秋、黄菊の花を採取して、蒸し上げたあと型に入れて天日に晒し干しあげる。蒸し過ぎると黒く変色してしまうので、そのあたりの加減がなかなかどうして難しい。慣れを要する。

出来上がった干し菊は胡桃や胡麻の和え物にしたり、ひたし物にしたりして、特に冬から春にかけての食物になる。栄養価は意外と高い。

「菊は菊でも、東北の菊でなくちゃあだめだ」

他所の土に生えたのは、苦くてとても口に運べたもんじゃないとは古老の言。

この評価には、長年喰い続けたゆえの、舌の慣れもあつたろう。

田螺たにしもまた、干物にしてよく用いられた。殻を潰して身を洗い、入念に水を切つてから天日に晒す。春先の田搔き前に採取するのが一般的で、これを専門に売り歩く商人までいたそうだ。

出来上がったモノは呑かますか布の袋に入れて、高所につるして保存しておく。年一度ぐらいの間隔で干しなおしてやつたなら、結構な時間経過にも耐えられた。

水に浸しただけでも喰えるし、乾いたまま口の中に放り込み、唾液で湿らせよく咀嚼して呑み込んでも構わない。腹持ちも優れているという理由から、兵糧としても好まれた。一升程度を携えて出陣する国人が、戦国期には多かつた。

まこと、喰えるものは何でも喰つて苛酷な年を凌いだのである。

が、しかし、如何になりふり構わず足搔こうが。

それでもなお乗り越えられない飢餓の大波があることがある。地獄の底が更に抜け、無間の闇を果てしなく落下し続けるような絶望の秋^{とき}。不可抗力的に、それは確かにあつたのだ。

死者	64698名
他領退散者	3330名
空家	10545軒

天明の大飢饉に於いて、南部藩が被つた損害である。

当時、南部の総人口は三十万前後と目されていたから、ざつと五分の一を失つた勘定になるだろう。

悲惨どころの騒ぎではない。

潰滅的——存亡の危機といつていい。

この悪夢のまさに最中に、東北を歩いた文人がいる。

彼の名前は橘南谿^{なんけい}。本業は医者であり、京都を拠点として活動していた。

その京都にも、東北地方地獄變の噂は盛んに流入していたという。「五穀は尽き、草木の根も葉も藁さえも、あるいは犬猫牛馬鼠鼈に至るまで、糧になり得る限りのものはどうの昔に獲り尽くし、住民はもはや互いの肉を喰らい合う段階にまで至つてゐる」と。
(まさか。――)

にわかには信じかねる話であつた。

噂はしよせん噂、実態から五割増しで語られるのが普通であろう。

が、南谿、後に紀行文たる『東西遊記』を草して曰く、

予が奥州に入りしは午年（筆者註、天明六年）の春なれば、もはや國豊かに食も足るべく思ひしに、卯年（天明三年）の飢饉京都にて聞しに百倍の事にして、人民大かた其餓死し尽して、南部津軽の荒涼なる、誠に目もあてられぬ事どもなり。

どうであろう、肩を落として、疲れた顔で、
「わしの予想は甘すぎた。前評判どころではない。あれを、あんな光
景を、天はなにゆえ許すのか——」

痛惜する彼の姿がまざまざと、目蓋に浮かぶようではないか。

南谿は秋田から岩手に入った。

入つて早々、髑髏や手足の骨が路傍に散乱すること夥しく、その白
さがいやに鮮やかに目についたという。

（現世の光景か、これが）

「異やうなるもの」に直面したショックで脳の中心が痺れたようになつたのも最初だけ。

「顔をそむけて通り過つる」ような可愛げは、すぐ南谿から失われた。

一里々々進み行くほどに甚枯骨多く、朝の間は五つ見しひるすぎて
十四、五も見しといふほどに、その翌日は二、三十も見つれ、又翌日
は五、六十もありといふにぞ。

進めば進むほど、遭遇する骨の数がどんどん増えてゆくのである。
(わしはいつ、賽の河原に迷い込んだか)

そのあたりの草むらから鬼が飛び出して来ないのが、いつそ不自然
に思われた。

とにかく、死骸をいちいち恐れていては当時の東北は一步だつて歩
けない。

南谿は慣れた。杖でしゃれこうべを突つついで多角的に観察し、

火葬せし髑髏と違ひ生骨の事なれば、牙齒も全く備り、婦人の頭あり、小児の頭あり、老人莊者皆それぞれに見わけつくべく、肩肘其外腰眼等の骨の模様逐一に委しければ、能医者の稽古也。

医術の達人はたとえ骨だけであろうとも、生前の生活習慣や持病の有無を見透すという。

経験を積むにはもつてこいの環境じやあないか、と。

ほとんどやけくそのような心境にまで到達している。

だが、地獄めぐりはまだ始まつたばかりなのだ。

外が浜を目指して北上するうち、一泊した女鹿澤村のある宿で、南谿はついに「窮極」と出逢う。

「最初は皆、道に行き倒れた死体の肉を切り取つて喰つておりました」人道に於ける最大の禁忌、「人肉食」カニバリズムの実態を。

「しかしながらぶん衰弱の果てに死んだわけでござりますから。水つ氣も失せた、そんな肉が美味しいわきやない。生きてるやつを率先して殺しだすまで、そう長くはかかりませんでした、はい」

人間、ぎりぎりまで追い詰められれば何でもやらかす、本当に限界は無くなるのだと。

想像を絶しきつたその有り様を、厭というほど思い知らされる破目になるのだ。

：卯年（筆者註、天明三年）飢饉に及び、五穀既に尽て千金にも一合の米も得る事能はず、草木の根葉其外藁糠或は、犬猫牛馬鼠鼈に至るまで、力の及程は取尽して食尽して、後には道路に行倒、みちみちたる死人の肉を切取食ふ事になりけるに、是も日久しく饑て、自然と死したる人の肉ゆえ、既に腐たる同然にて、其味甚あしく、生きたる人をうち殺し食ふは味も美なれば、弱りたる人は殺して食ふも多かりしなり。

宿の主人は訥々と語つた。まるで腹の底に溜まつた「何か」を、少しづつ千切り捨てでもするかのように。

それも仕方ない——話す内容が内容である。

「この近くにも家人ばたばたと死に続け、とうとう父と息子だけになつた家というのがございましてな」

こんなことをにたにた笑み崩れながら喋れるやつが居たならば、そちらの方が不気味であろう。人間性に欠陥がある。少なくとも筆者なら、そんな野郎が経営している宿屋なんぞで夜を明かす気にはとてもなれない。

南谿も、そこは同様だつたらしい。石を呑んだように重苦しい主人の貌に、彼はむしろ好意を抱いた。

「窮すれば通ず、と申しましようか。この父親が、ある日ひとつ計策を案じたのです」

「ほう、策を」

「へえ。策といつても、碌なものではございませんが」

南谿は続きを促した。

聞いてみると、本当に碌な話ではない。

父親はまず、拳を振り上げ隣家の戸板を乱打した。朽木のように黒ずんで、静脈の浮きもまた甚だしい腕だった。

「何じゃい」

ぐわらりと戸が開かれる。

隣人の姿も、負けず劣らず凄まじい。頬の肉がごつそり落ちて、落ち窪んだ眼窓の底で、黄ばんだ目玉がぎょとぎょと、胡乱な具合に揺れていた。

「さても御互いに空腹なることなり」

かすれ声で切り出した。

幽鬼に相応しい音色であつた。

「我家にも既に家内みなみな死うせしに、御覽の如く今は男子一人のみ残れり、是も殊の外にかつへれば、二、三日の間には死すべし、とても死にゆくものいたづらにせんよりは、息ある間に打殺し食せんとおもへども、さすがに親の恩愛手づからうち殺すにしおびず此故に其許そごもとに頼申候。我子を打殺し給はらば、其御礼には肉半分を贈申べし」

が、続けざまに持ち出した、「本題」の凄まじさときたらどうであろう。息子もどうせ救からぬ、近々死ぬに決まつとる。ならばいつそ早めに殺して味が落ちるのを防ぐべきだが、流石に人情がそれを許さぬ。わしの代りに、どうかこの作業をやつてくれ。報酬は肉の半分だ。

幽鬼どころの騒ぎではない。

冥府の獄吏、牛頭馬頭こぞどもも拳こぶつておぞけをふるいかねないこの要請に、しかし隣人は大喜びしたというから堪らなかつた。末法の光景そのものであろう。

彼はさつく鉈を取り、「獲物」の下へ馳せ向かう。消耗し、既に意識が朦朧としている少年に、抗う術などある筈もなく。

ただ一打ちで、息子は死んだ。

(これまで、暫くの間は喰いつなげよう)

ほつと胸を撫で下ろす隣人。罪悪感など身体のどこを探しても、厘毫たりとて見付からなかつたに違ひない。本当にうまい話であつた

と口の端を三日月に吊り上げたところで——その顔面が、二つに割れた。

「ひやつ、ひやつ」

音もなく忍び寄った父親が、後頭部にまさか^カりをぶち込んだのだ。隣人の頭部は、柘榴よろしくあつさり砕けた。

死体が、二つになつた。それを見下ろす父親の顔は、つい数秒前まで隣人が浮かべていたそれと、寸分違わず同一である。

(馬鹿め、まんまとかかりおつたわ)

彼の目的は、最初からこれにあつたのだ。隣人に息子を殺させたのは、人情の抵抗に遭つたからでは断じてない。ひと仕事終えたあとの一氣の緩み、致命的な意識の隙を欲しがつたからに相違なかつた。いわば、我が子を生餌に使つた。

いや、人によつては飢えが募ると頭の中がへんに冴え冴えとしてくるものだ。

こうなるともう、理性などまったく當てにならない。平素であれば彼自身、「鬼畜の所業」と蔑んだであろう行為でも、鼻唄まじりに平気の平左でやつてのけるようになる。

この父親は、まさにそういう人間だった。

彼が如何に周到だつたかは、なんどこの惨劇を説明するに、「隣家のもの餓たるあまり此の子をうちころし食はんとせしゆえに、仇を報ぜり」——空腹のあまり錯乱し、獸に墮ちて家の息子を殺しやがつた不届き者を成敗した。雄々しく仇を討つたのだと、一場の美談に仕立て上げ、盛んに吹聴して廻つたということである。

(何をこの、白々しい)

もちろん、こんな作り話を真に受けるほど村人たちはおめでたくない。

が、程度の差はあれ誰も彼も似たようなことをやつてているのだ。ひどく疲れ切つてもいる。父親を糾弾するだけの氣力を持ち合わせている輩など、一人たりとて居らなんだ。

斯くして彼は公然と、二人の肉を手に入れる。

塩漬けにしたそれにより、一ヶ月ほどは凌げたようだ。

が、天明の大飢饉そのものを乗り越えることは叶わなかつた。彼は死んだ。十万を超える死体の山、それを構成する名前もない一粒になつた。

(地獄だ。……)

死体にはなれつこの南谿も、これには戦慄せざるを得ない。胸糞の悪さに、胃が逆立ちして黄水がこみ上げそうだつた。

今にいたり東北の事を思ひ出せば、心中測然として氣分あしくなる事を覚ふ。只此所に記せるは百分が一なり。

残すところの九十九を、南谿はついに生涯記していない。

外伝

橋南谿が訪れたとき、黒川村ではちょうど池の一つが売りに出されたところであった。

「いくらだね」

「五百両でさア」

「……」

——馬鹿げている。

と、ここが黒川村でさえなかつたならば、南谿もあきれたに相違ない。

それだけの金を積んだなら、良田がいつたい何枚買えるか。考るだに愚かしいほどの額だった。しかも当の池ときたらどうだろう、田んぼ一枚ぶんにも満たない、小池と呼んで差し支えない規模ではないか。

本来ならば済もひつかけてもらえぬどころか、

「おのれ我を無礼^{はなめ}するか貴様」

取引する気が無いのなら無いとはつきり言えばいい、それをなんだ、迂遠な皮肉をかましやがつて、どんなつもりだこの野郎、曲った性根を叩き直して欲しいかよ——と。

挑発として受け取られ、喧嘩になつてもおかしくはない発言だった。

ところがしかし、くどいようだがここは黒川村なのだ。

自然じねんと原油の湧き出す、日本最古の油田地帯なのである。

江戸時代も戦国時代も室町時代も鎌倉時代もすつとばし、平安時代さえ超えて、古色蒼然神さびた奈良・飛鳥朝のむかしから。この地に棲まう人々は油と水の分離法を心得て、その成果物を時の朝廷に献上し、恭順の意を顕していた。

そのあたりの消息は、橋南谿訪問の、この江戸時代中期に於いてもさして変わらず。村人たちは「カグマ」と呼ばれるシダを束ねた道具で以つて採油を行い、一つの池から毎日およそ二升ばかりの油を得て

いたということである。

これがいい商売になるのだ。

『東遊記』から南谿自身の言葉を引くと、

：されば此辺の人は、他国にて田地山林などを持て家督とする如く、此池一つもてる人は、毎日五貫拾貫の錢を得て、殊に人手もあまた入らず、實に永久のよき家督なり。此ゆゑに池の売買甚だ貴し。

まず、このような具合であつた。

今も昔も、エネルギー資源は巨万の富を齎すらしい。

南溪はまた、同じく新潟県内で、天然ガスの発火現象をも目撃している。

というよりも、順番的にはこちらが先だ。如法寺村の火井かせいこそがすなわちそれで、黒川村から南西に、だいたい 65 km ほどの地点に位置しているから、そのぶん旅の出発地点の京に近いことになる。

以下、再び『東遊記』の文章から該当部分を拝借すると、

：此村に自然と地中より火もえ出る家二軒あり、百姓庄右衛門といふ者の家に出る火もつとも大なり。三尺四方ほどの圍炉裏の西の角にふるき挽臼を据ゑたり、其挽臼の穴に箒の柄程の竹を一尺余に切りてさし込有り、其竹の口へ常の火をともして触るれば、忽ち竹の中より火出で、（中略）此火有るゆゑに庄右衛門家には、むかしより油火は不^レ用、家内隅々までも昼の如し。

噴出口に石臼を据え、節を抜いた竹を刺し、パイプ代わりに用いることでその切り口に火を燈す。

なんともはや、日本の道具立ての眺めであつた。

「これは、いつの頃からこのように？」

南谿の疑問に、

「正保二年三月と、そのように伝えられておりまする」

淀みない口ぶりで、当代の庄右衛門は返答こたへえてのけた。

「正保というと、家光公が、たしかまだ」

「へえ、百と四十二年前になりますな」

（なんと、それほどむかしから。……）

流石に目を見張らずにはいられない。

改めて火に視線を向ける。我ながら現金と知りつつも、謂れを知る以前より光芒が増したようだつた。

ついでながら正保二年は西暦換算で一六四五。

一〇二二年現在から観測すると、三七七年前に相当する。

如法寺村の火井については、やがて葛飾北斎もその有り様を描き写し、『北斎漫画』に加え入れるなど北陸屈指の名勝として声威をいよいよ逞しくした。

明治十一年にはなんと、至尊——天皇陛下のご来臨にさえあづかっている。北陸巡幸の道すがら、めでたくも鳳駕を寄せられ給い、ご観覽あそばされたとのことだ。

幸福な火としかいいようがない。

外伝・鐵の徒花

角銭こそは天明の飢饉の遺子である。

人心も、治安も、経済も——あの空前の凶作以来、すべてが墮ちた。

東北地方、特に津軽のあたりでは、野良着姿の百姓までが、蔬菜の出来を語るのと何も変わらぬ顔つきで、

「老人の肉、死人の肉は不味くてかなわん。ぱさぱさしていて味がない。ちつとも力がつく気がしない」

「喰うならやはり、女子供か。味が濃くて柔らかだ」

力ニバリズムの品評を交換し合つたほどである。

こういう異常な体験は、もちろん長く尾を引いた。

どころではない。経験者の精神を永遠に、不可逆的に変質させたといつていい。

既に人肉喰いという、最大の禁忌に触れている。

「いまさら盜も付け火も殺人も、などで憚るべきやある」

奇妙な心理作用だが、それが生存者達にとり、一種免罪符的な効果を發揮したらしい。どうせ救われないのなら、先途は地獄と決定済みであるのなら、地上に於ける悪業という悪業を極め尽くして逝くべきだ。さもなきやあ、なにやらひどく損をする、間尺に合わない感がある。

無敵の人心理に近い。

かくて東北の山野には追い剥ぎ・強盗・殺人嗜好の破落戸どもが跳梁し、ここを通る旅人に極度の緊張を与え続けた。

橋南溪の『東遊記』にも、

…その時、人を食ふ事だにも常の事に成り、老人の肉、死人の肉は味なし、婦人、小児の肉はやわらかにしてうまし杯、皆食ひ覚へて評する事になれり。是に付て、人を殺す事、家を焼事杯もたやすき事に覺へ、況や人の物を奪ひ掠むる事は誰恥る者もなくなれば、其余風今に残り、盜賊の沙汰のみ多くて、余杯が通行も安き心なかりし。

鬼氣というか、妖氣というか、名状しがたく不穏・不快な雰囲気がまざまざと書き記されている。

どこから手を着ければよいのかさえもわからぬ慘状。

だからといつて本当に口を開いて突つ立つたままの姿では、為政者たるの甲斐がない。

復興に向け、仙台藩が動きはじめた。めたためになつた台所事情の立て直しを図るべく、思いきつた策に出る。独自貨幣の鋳造を幕府に願い、許可を得たのだ。

「五ヶ年期限」「流通は領内に限ること」等々の但し書きはつくものの、兎にも角にも仙台藩は力ネをつくつて可くなつた。

せつかく握つた権限である、活用せねば嘘だらう。

というわけで彼らは大いにやつた。「仙臺通寶」の四字を刻んだ新貨幣、角を丸めた四角形という外見的特徴から専ら「角錢」と通称される物体を、造つて造つて造りまくつた。

このあたりでもう一度、橘南溪の筆を借りよう。

京の都を幾千里、山河を踏み越え遙々と、白河関のずっと奥、仙台平野にこの医師殿の草鞋の跡がついた際。奇しくも彼の地の事情にあつては、「國中に角錢みちみちて」——仙臺通寶の流通、たけなわ酣なる時期だった。

南溪もまた、様々な用に弁すべく、さつそく手持ちのいくらかを角錢に変えたものである。

が、すぐに後悔した。

理由は大別して二つ。

一つ目はごく単純に、角錢の質が悪いこと。

「此角錢甚惡敷鐵あしきにて、破碎くる事石瓦も同じ様也」——「財布に入れただけで壊れる」「百文を支払つてゐるうちに、一々三文は駄目になる」と方々で批判されるほど、角錢の壊れやすさときたら折り紙つきなものだつた。

耐久性の低劣は、勢い貨幣それ自体の信頼性の低下へと波及せずに
はいられない。

橋南渓の見ている前で、角銭の価値はどんどん下がつた。

「初には金壱歩に角銭二貫三百文を買いしに、毎日錢相場下りて、後には二貫七百、八百、九百にも及べり」——これが二つ目、自由落下もかくやとばかりの、急速な値下がりぶりである。

「この調子だと、一ヶ月後には四貫のラインを割つてしまうのではないか」

半ば本気で、南渓は予測したものだ。

錢相場の変動に合わせて、あらゆるすべてが騰貴した。

従来四～五文だった草鞋は十六～七文、下手をすれば二十文を放り出してやつと購う域であり、かつて一泊百二十文を謳つた旅籠は三百五十文払わなくば床を貸さぬと言い張つた。

全体的に三倍程度の値上がりである。「替らざるものは宿継人馬の賃銭のみ公儀の御定の通り也。此故に宿々の困窮も亦甚し」——なんだか『東遊記』の記述が段々と、社会実験の報告書に見えてくる。「仙台侯はなんだつて、態々こんな粗雑な銭を鋳つたのか」

橋南渓は首をかしげた。

「わしながらきつと逆をする」

すなわち寛永通寶よりも——世間一般に流通している「丸銭」よりも質のいいのを作製し、衆の輿望を搔き集め、以つて流通の拡大を待つ。ごく穩当な常識論を述べている。

もつとも南渓の本領は医術であつて経済ではない。

理論と実際の食い違いは世の常だ。経済学の分野に於いて、その弊は特に甚だしい。素人玄人のべつなく、立てた予測は片つ端から踏み躡られる。常識など時として、一文の価値も持たぬばかりか逆に負債のタネになる。

橋南渓の聰明さは、どうやらそのあたりの呼吸をもなんとなく察していた点だ。

「わしならうする」のすぐ後に、「さりとて所詮こんなのは、素人の机上の空論だから」と予防線を張つてゐる。

「畢竟は机上の論なれば、直に政を取る人の上にては、かくのごとくならざれば不叶道理も有にや」——一国の政治を左右するお歴々とあろう頭脳が、この程度の考えに逢着してないはずがない。きつと自分のような門外漢には片鱗さえも掴めない、なにか深遠な計算が働いてるに違いない。意訳するならこんな具合いか。みごとな韻晦の手腕であつた。

「灰色」こそが安全地帯だ。迂闊に白黒決してしまうと馬鹿を見る。趨勢に確信が持てるまで、自己の意見は適当に煙らせておく、がよい。